

借用語に現れる重子音の通言語的研究

1. はじめに

日本語における英語からの借用語に特有な現象の一つとして重子音化がある。これは、原語が語末に「短母音+阻害音」を持っている場合に起こる(大江 1967 等)。

- (1) *top* /tɒp/ => トップ [toppu]
cut /kʌt/ => カット [katto]
kick /kɪk/ => キック [kikkuu] (川越・荒井 2002 等)

以下は重子音化の要因に関する先行研究の主張である。

- ①原語の音声・音響知覚 (Takagi & Mann 1994 等)
 ②借入言語の韻律構造の指向性 (Kubozono et.al. 2008 等)
 ③原語の音節構造・モーラ (Lovins 1975, Katayama 1999 等)

本研究では日本語に加え、単子音と重子音が音韻論的に区別される諸言語における同様の現象を分析・考察し、その結果から、上記③の説明の妥当性を述べ、借用語適応において「原語の語末子音のモーラの保持」を要求する制約が通言語的に存在する可能性を示す。

2. 日本語

日本語における借用語では、原語が語末に「短母音+阻害音」という音連続を持つと規則的に重子音化が起こる(1)。日本語で許容される音節構造を考えると、原語と同じ $CVC]_{\sigma}$ を作るには、重子音を用いて $CVC]_{\sigma}CV]_{\sigma}$ とするしかない。つまり、重子音化は「原語の語末音節構造の保持」であると考えられ、モーラの観点からも「原語の語末子音のモーラ保持」が行われていると言える(2)。

- (2) (E.) $t_a p]_{\sigma}$ => (Jpn.) $t_o p]_{\sigma} p u]_{\sigma}$
 $\begin{array}{c} | | \\ \mu \square \end{array} \quad \begin{array}{c} | | | \\ \mu \square \mu \end{array}$

3. 北米におけるイタリア語変異形

北米大陸で話されているイタリア語(NAI)における借用語でも、原語の語末に「母音+阻害音」を持つと規則的に重子音化が起こる(3)。

- (3) *tip* /tɪp/ => [tippa] *tape* /teɪp/ => [teppa]
foot /fʊt/ => [futto] *suit* /su:t/ => [sutto]
book /buk/ => [bukko] *creek* /kri:k/ => [krikka]

(Repetti 2009 等)

NAI も原語と同じ $CVC]_{\sigma}$ という音節構造を作るには、重子音を用いて $CVC]_{\sigma}CV]_{\sigma}$ とするしかない。ただし、イタリア語では母音の長短が弁別的でなく(Kramer 2009)、CV:C も CVC として適応されるため、原語の語末音節構造・モーラ保持が広範囲で行われる(4)。

- (4) (E.) $su:t]_{\sigma}$ => (NAI) $s_u t]_{\sigma} t_o]_{\sigma}$
 $\begin{array}{c} | | \\ \mu \square \end{array} \quad \begin{array}{c} | | | \\ \mu \square \mu \end{array}$

4. フィンランド語

フィンランド語における借用語でも、原語が語末に「母音+無声阻害音」を持つと規則的に重子音化が起こる(5)。

- (5) *cup* /kʌp/ => *kuppi* [kuppi]
bit /bɪt/ => *bitti* [bitti]

- president* /ˈprezədənt/ => *presidentti* [presidentti]
deck /dek/ => *dekki* [dekki]
music /ˈmju:zɪk/ => *musiikki* [musi:kki]
 (Karvonen 2002 等)

また、子音連続が許され、超重音節が可能であることから、原語の語末が「共鳴音+阻害音」及び「長母音+阻害音」の場合も重子音化が起こる(6)。

- (6) (E.) $-de_n t]_{\sigma}$ => (Fin.) $-de_n t]_{\sigma} t]_{\sigma}$
 $\begin{array}{c} | | | \\ \mu \mu \square \end{array} \quad \begin{array}{c} | | | | \\ \mu \mu \square \mu \end{array}$

さらに、舌頂音は単独で音節末となりうるにもかかわらず、重子音化が起こる。これは、英語では CVC は重音節だが、フィンランド語では CVC は軽音節であり、 $CVCC$ が重音節である(Karvonen 2002)ことから説明できる。つまり、 CVC のままでは軽音節となり、語末子音のモーラが保たれないが、重子音を作ることで重音節が形成され、モーラが保持される(7)。従って、語末音節構造の保持だけでなく、語末子音のモーラ保持も行っていると言える。

- (7) (E.) $bi_t]_{\sigma}$ => (Hun.) $bi_t]_{\sigma} ti]_{\sigma}$ $*bi_t]_{\sigma}$
 $\begin{array}{c} | | \\ \mu \square \end{array} \quad \begin{array}{c} | | | | \\ \mu \square \mu \mu \end{array} \quad \begin{array}{c} | / \\ \mu \end{array}$

5. ハンガリー語

ハンガリー語における借用語でも、原語が語末に「短母音+阻害音」を持つと規則的に重子音化が起こる(8)。

- (8) /p/ *chip* /tʃɪp/ => *chip* [tʃipp]
 /t/ *set* /set/ => *szett* [sett]
 /k/ *check* /tʃek/ => *csekk* [tʃekk] (Nádasdy 1989 等)

また、子音連続が許され、阻害音も単独で音節末になりうるため、 CVC を保持するだけであれば重子音化は不要である。しかし、ハンガリー語の語末では CVC は軽音節であり、 $CVCC$ が重音節である(Ham 2001)。 CVC のままでは軽音節となり、原語の語末子音のモーラは保たれないが、重子音を作ることで重音節が形成され、モーラが保持される(9)。従って、原語の語末音節構造ではなく、語末子音のモーラを保持していると解釈できる。

- (9) (E.) $se_t]_{\sigma}$ => (Hun.) $se_t]_{\sigma} t]_{\sigma}$ $*se_t]_{\sigma}$
 $\begin{array}{c} | | \\ \mu \square \end{array} \quad \begin{array}{c} | | / \\ \mu \square \mu \end{array} \quad \begin{array}{c} | / \\ \mu \end{array}$

6. まとめ

本研究で示した子音の長短が弁別的な4言語はいずれも、原語の語末阻害音を規則的に重子音として適応しており、その特徴の多くは共通していた。このうち、原語に比べて許容される音節構造・音節量が限られている日本語とNAIでは、重子音化は原語と同じ語末閉音節を形成するための現象であるが、多様な音節構造や音節量が許されるフィンランド語やハンガリー語では、原語の語末子音のモーラを保持するための現象である。後者の説明は前者で示した言語でも可能であることから、借用語適応において「原語の語末子音のモーラ保持」を要求する制約が通言語的にあることが示唆される。